

華街跡から華街へ

山口 広助

今から一五年前、長崎歴史文化協会の委員でもあられた故高田泰雄先生の協力を得て「丸山華街跡の碑」を建立しました。

このときはあえて「花」の文字を使わず、華やかな意味を込めて「華街」としました。建立に際し長崎歴史文化協会や長崎史談会の多くの先生方に大変お世話になり、ここで改めて感謝申し上げます。

さて、建立の前年の平成十一年(一九九九)は私が長崎学に少しだけ足を踏み入れたときでもあり、何も知らない私にご教授いただいたのが高田泰雄先生、越中哲也先生、そして江口淳二先生など多くの先生方で、又、先生方の勧めで足元を固める意味でも、自分の地元、丸山の歴史を調べ始めました。そして私はすぐに丸山特有の歴史に驚き、その大切さを周辺に話し始め、私の行動は長崎市の観光部署へ赴き、「丸山花街跡」の看板設置を要望します。しかしその返事はあきらかに「お断り」でありました。もちろん私の説明不足と思入れただけで行政へ立ち向かうのは難しく、「個」の力の無さをかみしめる瞬間でもありました。私はその足で早速、看板屋に向かい、次いで材木屋に木材を注文し自分の手で「丸山の碑」建立を決めたのです。もうそれは自己満足そのものといわれても仕方がないことでした。



「長崎丸山華街之碑」解説板

翌十二年一月、作家のなかにし礼先生が小説「長崎ぶらぶら節」で直木賞を受賞されました。そしてじわりじわりと世間の目が丸山に向くようになり、越中先生が発起人となり長崎史談会で丸山歴史探訪の企画が立ち上がりました。私は今まで準備したものがここで役立つとは思いませんで

したが、夜通しかけて作り上げた資料を携え本番に臨みます。参加者は一〇〇人を超え、狭い丸山の路地で無我夢中で解説したことを昨日のこのように覚えていきます。そして、準備した「丸山華街跡の碑」の解説板を通して丸山の意義や大切さを多くの人々に伝えることができました。不思議なもので、私が歴史を調べたことで判明したもの一つに、ちょうどこの年が丸山町の鎮守神である梅園天満宮が創建三〇〇年を迎えるということ、丸山町自治会長に就任したばかりの今は亡き角海老の社長松浦矩亨氏と共に、明治時代に行われた二〇〇年祭の記述をもとに創建三〇〇年祭を行いました。そして、其の祭のとき、長崎では珍しい女神輿の練り歩きや、御神体の御開帳、宝物の展示と三日間にわたる祭事は成功裏に終わり、多くの観光客や市民のみなさまにも参詣して頂きました。この成功を弾みに翌年から私達は「丸山華まつり」と称し、花魁道中など花街らしい催しを加え今なお継続中です。

この創建三〇〇年祭の後、松浦会長の「何かをやらなければ何も始まらない」の口癖は、何もしなかった丸山町でいろいろながさきが始まり出します。それまで年に三回しか行われなかつた梅園天満宮境内の開放が常時開放となり、さらに境内の梅の実をみんなで収穫をする「梅ちぎり祭」、その梅で参詣者へ振る舞う梅酒作り。夏には子供ラジオ体操や、50年以上途絶えていた精霊流しのもやい船も始まり、町には活気が生まれ町が動き始めました。そして次に丸山町の長崎くんち踊町が復活、そして平成十五年(二〇〇三)には、長崎くんちの年番町を引き受けたのです。丸山町の年番町出演は、くんちが始まった四〇〇年近い歴史の中で初のこと。それは花街としての特権と伝統を打ち消すものだという声もありましたが、一踊町として新参者として参加させてもらいました。そしてお役目は無事に済ませることができ、いよいよ平成十八年(二〇〇六)の長崎くんち踊町の復活に向けてスタートラインに立ちます。

○五月三日(日)は「ながさき9条フェスタ」会。市公会堂前十三時二十分集合・出発。

○前号でもお知らせしました五月四日恒例の長崎九條の会主催「第九回憲法さるく」。参加者も多く盛会。特に今回は子供達にも平和の事を学びましょうと子供茶会の開催は好評でした。

○次いで五月五日は「子供の日」。昔は旧暦の五月五日(現六月二十日)を「男の節句」とし「家々軒先に菖蒲とフツを挿し」、家の前には大きな吹き流しをつけた鯉のぼりと、武者を描いた「節句バタ」が何本もたててありました。この「男の節句の日」には各家、唐あくチマキ・露(つゆ)の味噌汁、ノウソの湯引、干フグ・干大根・焼豆ふの煮しめが用意してあり、大波止ではペーロンがありました。旧記をみると「町々、この日セーランエあり子供大いに賑わう」ともありました。

○また五月の行事として「各町・井がわ祭りあり街をあげて祝う」とあり、「この日は各町・井戸わきに祀る水神宮に鏡餅・甘酒・ビワ・黄瓜を供え神主を迎え祝い事をした」とありますが、現在は殆んど見かけないようです。

○四月二十三日(木)は長崎県美術館開館十周年の記念「スペイン黄金世紀の静物画特別展」開会式あり出席。盛会。

○今月各方面より御寄贈いただいた書籍

一「ながさき経済4月号」長崎経済研究所編・発刊)、県内企業生産の持ち直し、観光客の増加あり長崎の経済の先行き持ち直す見通しあり。問題点は、「人材の不足、買上げ受注の不振、仕入商品または原材料の値上げ」とある。一「わかる!和華蘭新長崎市史普及版として長崎市より発刊。市長の発刊の辞に「前発刊の新長崎市史を分かり易くコンパクトにまとめた」とあり、写真も多く楽しみながら学べる、大いに参考となる本だった。(四月中旬より一般書店にて販売・九〇〇円+税)

一「野村美術館研究紀要24(三月刊)」韓国高麗茶碗研究特集号で伊先生他七氏の論考。最後に谷晃先生の「高麗焼には従来窯・借用窯・倭館があるというが未発掘で調査不充分、再調査が望ましい」とあった。一「危機の中の平和憲法」(福岡博孝法律事務所内青井未帆講演会実行委員会刊)学習院大青木教授が二月十四日NBCホールで講演された内容を整理した冊子。「平和憲法に関する思いや考え」について深く感じさせられるものがあつた。

丸山町の踊町復活は四一年ぶりとなり、それを知る人は高田泰雄先生ぐらいで連日のお話を伺ったのは私にとつて歴史を紐解く醍醐味のようなものでした。もちろん昔と今とはやり方や仕来りも変わってしまいましたが、世の中にこんなに楽しいことがあるのかと思うほど夢の実現に心うなせれます。そして多くの方々からの助言や、みなさま方に支えられ踊町が復活、諏訪の踊り場での声援は今でも忘れられない思い出です。いろんなことが軌道に乗り、そして思っていたことが次々と叶っていく。でも、当初から懸念していたことがあつたのは、町内での人材不足。はじめは三十代の私が考えることではないと先輩方はおっしゃいましたが、あれから十五年、それは切実な問題になってきました。始めることの難しさを知りましたが、今は継続することの難しさを感じています。多くの方々にご尽力いただいています。いつまでも甘えるわけにはいきません。しかし現実問題として、町に人がいないのです。高齢化社会とアパート・マンション中心の町には人との関わりが極端に少ないです。おそらく丸山町にとつての永遠の課題かもしれません。

さて、私の住む丸山はそもそも「花街跡」なんですか? そもそも花街とは何でしょうか?

今、落ち着いて考えました。丸山には長崎検番がある。芸妓衆がおられ、そして料亭があり、つまり、この町には花街と呼べる要素が存在していることに気付きました。過去ではなく現在進行形です。そこで振り返って感じたことは「丸山華街跡」ではなく、「丸山華街」なんです。

今回の再建にあたり、文字を少しだけ改修しました。それは「跡」を削除し「丸山華街の碑」と改修したことです。寛永十九(一六四二)年より始まった花街は三七〇年以上続いています。江戸時代からそのままの続いている文化が丸山にあるのです。

私自身、料亭に生まれて料亭で育ち、そして料亭を営んでいます。これから先、丸山に料亭は増えることはないと思いますが減ることないよう営業を続け、「街」が「跡」にならないよう過「ごさ」なければなりません。丸山の存在理由でもある花街を微力ながらも支えたいと思っています。

(長崎歴史文化協合理事)

風信

今年の「夏も近づく八十八夜」は五月二日でした。そして、此の日に摘んだお茶には「味わいがあります」との説明でした。

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一 一五四〇

十八銀行公会堂前出張所 2F

